

クリスマスの
よるこ 喜びを つた 伝える

「明日、おばあちゃんの クリスマス・ビンゴゲーム大会に行かなくちゃ いけないかなあ？」 お母さんと いっしょに クリスマスの スナック袋を 用意しながら、エリカが たずねました。「友だちの ミンディが、遊びに 来たいって 言ってるんだけど。」

「エリカ、おばあちゃんが ^ああなたに ^え会えるのを
 すごく ^{たの}楽しみに ^ししてるのは ^し知ってるでしょ。クリスマスの
 ビンゴゲーム大会は、おばあちゃんの ^{たいかい}大好きな ^{だいす}
 休日イベントだし。それに、その ^{じゅんび}準備のために ^{きゅうじつ}すごく
 時間を ^{じかん}かけてきたわよね。」と、お母さんが ^{かあ} ^い言いました。

「でもね、お母さん。今週は ^{かあ}ずっと、^{こんしゅう}ミンディに
^あ会ってないの。それに、ミンディは ^いすぐにおじさんと
お婆さんの ^{いえ}家にとまりに ^い行っちゃうのよ。さびしくなるわ。」

「それじゃあ、いっしょに ^{たいい}ビンゴゲーム大会^いに行かないかって、
^{かのじょ}ミンディを ^{かのじょ}さそってみたら どうかしら？ ^{かのじょ}彼女が
^い行きたいなら、^{こま}細かい ^{かのじょ}ことは ^{かのじょ}わたしが ^{かのじょ}彼女の
^{かあ}お母さんと ^{はな}話してあげるわよ。」と ^{かあ}お母さんが
^{ていあん}提案しました。

「分^わかった。じゃあ、ミンディに^き聞いてみるわね。」と、
エリカが^い言いました。



つぎ ひ、ミンディが エリカの いえ きに 来ました。
「カリストーさん、わたしを いっしょに つ 連れて行って
くださって、ありがとうございます。母からは
よろしくとの ことでした。ビンゴゲーム大会、楽しみです。」

「いっしょに 行って うれしいわ、ミンディ。」と、
エリカのお母さんが 言いました。

エリカのおばあちゃんが くらしている 老人ホームに
つくと、3人は ホールに 向かいました。ホールの
ま なかには、きれいに かざられた クリスマスツリーが
あります。ホールいっぱい テーブルと いすが 用意され、
クリスマスの かざりつけで、ホールは 活気に 満ちた
クリスマスの ふんいきに 包まれていました。

「エイミーと エリカ、よく 来たわね！」 おばあちゃんが
こえ あげました。「来てくれて、本当に うれしいわ。
ダーラと ノアが 準備を 手伝ってくれてるんだけど、
あなたたちにも 手伝って もらえると 助かるわ。」

「こんにちは、ミンディ。あなたも クリスマスの
ビンゴゲーム大会に 来てくれるって、聞いてたわ！」



「はい、ウェイバリーさん。エリカから、
クリスマスの ^{たいかい}ビンゴゲーム大会の ことを
聞きました。お手伝いできるのが ^{たの}楽しみです。」

「さあさ、^{じかん}時間を むだに している ひまは
ないわ。お客さんたちが 1時間後には 来るから、
^{じゅんぴ}準備を ^{ばんたん}万端に しておかないとね。」と、
ウェイバリーさんが ^い言いました。

そこで みんなは イベントの ^{じゅんぴ}準備を
^お終わらせに かかりました。最初の ^{さいしよ}お客さんが
来ると、エリカと ミンディは その ^{ひと}人たちを
^{せき}席に ^{あんない}案内し、クリスマスの ^{ぶくろ}スナック袋を
^{わた}渡して、^{けいしよく}軽食や ^の飲み物を ^だ出しました。
^{きやく}お客さんが みんな 来ると、ウェイバリーさんが
ピアノで クリスマスキャロルを ^{なんきよく}何曲か ひき、
^{きやく}お客さんたちも いっしょに ^{うた}歌いました。

「エリカ、こっちに ^き来て 『クリスマスの 12日』を
^{うた}歌ってくれないかしら?」と、おばあちゃんが
たずねました。



「ミンディも、いっしょに ^{うた}歌って いい？
^{がっこう}学校の ^{かい}クリスマス会のために、ずっと いっしょに
^{れんしゅう}練習してるのよ。」と、エリカが ^い言いました。

「もちろんだわ！」 おばあちゃんが
うれしそうに ^い言いました。

^{ふたり}二人は ^たピアノの そばに ^た立って、
クリスマスキャロルを ^{うた}歌い ^{はじ}始めました。
^{うた}歌い終わるころには、^おお客さんも ^{きやく}みんな、
^て手びょうしを ^いしながら いっしょに
^{うた}歌っていました。

ビンゴゲームが ^{はじ}始まると、ウェイバリーさんは
^{ふたり}二人に、^{ふたり}二人の ^{きやく}お客さんと いっしょに
^てすわって ^{つだ}手伝ってあげて ^{たの}ほしいと 頼みました。
ミンディは ハリエット・プラマーさんの となりに、
エリカは ジョージ・ドゥーリーさんの となりに
すわりました。

「エリカちゃん、^て手伝ってくれて ありがとうよ。
わしは、^い言われた ^{かず}数が ^{ときどき}時々 ^き聞こえないんだ。
それを ^{おし}教えてくれると ^{たす}助かるよ。」



「喜んでお手伝いします。」と、エリカが言いました。

ゲームが始まり、ミンディとエリカは、新しくできた
友だちを一生けん命に手助けしましたが、それは
なかなか楽しいものでした。そして、あっという間に
ゲームは終わりに近づいてきました。

「まあ、見てちょうだい！ あとは4が出れば、
ビンゴだわ！」と、ハリエットさんが言いました。

「次の数字は・・・」と、エリカのお母さんが
言いました。「4です！」

「やったあ！ ビンゴよ！ ビンゴ！」 ミンディが
さげびました。

ハリエットさんは、クリスマス雑貨やお菓子が
いっぱい入ったかごを差し出されて、うれしそうに
にっこり笑いました。「まあ、すてき！ わたしの好きな
クッキーもあるわ。ミンディ、あなたも好きなものを
かごから取りなさい。あなたが手伝ってくれなければ
勝てなかったもの。」



ミンディは チョコレートを 取りました。
「ありがとうございます、ハリエットさん！
いっしょに ゲームが できて、すごく 楽しかったです！」

お客さんも ウェイバリーさんも 言いました。
「また 来てね。今日は いっしょに 過ごせて、
とても 楽しかったわ！」

エリカと お母さんは ミンディを 家まで
送りました。車から 降りると、ミンディは 友だちの
エリカに ハグを して 言いました。「さそってくれて
ありがとう、エリカ。今年は クリスマスの 喜びを
伝える お手伝いが できて、とても よかったわ。
わたしの 心も ハッピーに なれたもの。」

「本当に そうね。いっしょに クリスマスの
喜びを 伝える ことが できて、うれしいわ！」

